

（毎月2回1日・15日発行）第12巻1号（通巻215号）
1997年3月10日第3種郵便物認可

pen

with New Attitude

1/15

2008 No.215
新年合併号
特別定価 600
yen

10
周年
The 10th ANNIVERSARY

完全保存版

芸術の都をめぐる旅へ。

パリ美術館マップ



クリエイターを 探せ。

萩原 修・文
text by Shu Hagiwara
uga・写真(人物)
photograph by uga

#054

長根 寛

Hiroshi Nagane

照明デザイナー

1967年青森県生まれ。日本デザイン専門学校卒業後、イワイを経て、95年に東京デザインパーティーを設立。住宅、店舗、施設、展示会などの照明計画を手がけ、光による豊かな暮らし方を提案。www.designparty.net



照明は空間の質を高める“名脇役”、目立たないぐらいがいい。

照明デザイナーの長根寛さんが、京和傘の老舗「日吉屋」とコラボレーションした照明「古都里「KOTORI」」が注目を集めている。2007年グッドデザイン賞を受賞。続いて「新日本様式」100選にも選ばれた。

上のポーターレートの照明が、それだ。和傘の上部を切り取って、傘と同様になめらかに開く円筒のシンプルな形を実現した。もちろん簡単に折りたためる。あまり用いられなくなった伝統的な技術を使って何ができるか、試行錯誤を重ねたという。

長根さんは専門学校を卒業後、特注の照明器具を作るメーカー、イワイに就職。2年間は営業に従事し、その後の6年間はデザインセクションに所属。製造現場に通って、素材や技術をコントロールする術を獲得していった。また、会社に在籍していた頃から、デザイナーやアーティストと、明かりの展示会を企画。のちに「アカリ・イマジユ」という名前で、明かりの楽しさや可能性を伝える活動に発展、現在も継続中だ。「照明デザインは空間の設計者や施主など、いろいろな人々との協同作業です。このイベントも少

し似ていて、多くの仲間たちの協力があつて続いています」

右下の写真は、青森県立美術館で行ったそのワークショップ。「ヒカリアソビの種」と題し、1000個のLEDを床面にまいて点灯させ、いろいろな形を作つて楽しんでもらった。

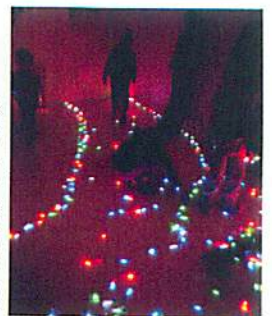
独立は95年。以降の長根さんの仕事は、建築家やデザイナーと協同して、空間やその場を利用する人にふさわしい照明を作り出すこと。最近では、クライアントからの直接の相談や、インテリアを含めてトータルに空間を作る仕事も増えてきている。何が好きなのか、何を求めているのか、訊き出すことからデザインが始まるそうだ。右上の写真は飲食店の照明計画。うっすらと光を通す人工大理石の特注の照明器具を使い、目に優しい光のラインを作つた。長根さんは語る。「照明は名脇役として、すぐけない。ほうがいいですね。意識をしなければ照明そのものが目に入らないように心がけています」

長根さんが照明デザインを手がけたスペース——その場に身を置けば、明かりが空間の「質」を高めていることに自然と気づくだろう。

WORKS



ベトナム料理「コム・フォー」丸の内店。間接照明と卓上のライン照明で空間を広く感じさせている。インテリアを手がけたのは内田隆造



「アカリ・イマジユ」のワークショップ。クリスマスライブ、青森県立美術館に100名の親子が集まって、LEDの光で遊んだ。